⑲日本国特許庁（JP）　⑪特許出願公告

⑫特許公報（B2）　平5－55136

⑤Int. Cl.⁵　識別記号　庁内整理番号　㉔㊹公告　平成5年(1993)8月16日
A 61 B 17/32　310　8718－4C

請求項の数 1 （全7頁）

㊿発明の名称　腱鞘切開刀

㉑特　願　平1－282390　㊺公　開　平3－141939
㉒出　願　平1(1989)10月30日　㊸平3(1991)6月17日

⑫発明者　湯本　義治　長野県須坂市大字小山1455－4
⑪出願人　湯本　義治　長野県須坂市大字小山1455－4
⑭代理人　弁理士　綿貫　隆夫　外1名
審査官　川端　修

1

2

㊼特許請求の範囲

1　把持部たるグリップと、グリップに連結して設けられ皮下に刺入可能なシャフトと、シャフトの先端部の前端面に設けられた刃部と、刃部の下部に前記シャフトの軸線とほぼ直角に折曲して前端が刃部前方側に突出するヘッドとを有することを特徴とする腱鞘切開刀。

発明の詳細な説明

（産業上の利用分野）

本発明はばね指の手術において腱鞘を切開する際に用いる腱鞘切開刀に関する。

（従来の技術）

ばね指とは指の屈伸運動が円滑に行えず、指を屈伸させると一定の角度で指が引つ掛かり、無理に屈曲あるいは伸展させると弾発現象をともなつて突発的に屈伸する症状である。一般には、屈筋腱と屈筋腱鞘の間の円滑な関係が失われて腱のスムーズな動きが阻害された状態をいう。

このばね指を治療する方法として、手術によつて腱鞘を切開することがなされている。腱鞘は屈筋腱を筒状に包む靱性を有する組織で、手術では症状のある指の腱鞘を切開することによつて指が容易に滑動できるようにする。

腱鞘の手術に際しては、皮膚を切開して腱鞘を直視しながら行う方法が一般的である。しかしながら、このような開放性手術の場合は、手術跡が残つたり、治癒するまでに時間がかかるという問題点があり、皮膚切開を最小限にして行う経皮的切開手術が最近行われるようになつてきた。この経皮的切開手術は切開範囲が小さくて済むので、治癒が早く、手術跡も目立たないという利点はあるものの、直視しないで手術しなければならないため手術が難しいという問題点がある。

第8図は、ばね指の経皮的切開手術として従来なされている方法例を示す。前記腱鞘10は線維状体からなるもので、指の屈筋腱12の外周に筒状に巻きついた形になつている。手術においては、図のように手術用のメス14を皮膚14の切開点から刺入し、屈筋腱12の上部をなぞるようにして腱鞘10を切開する。経皮的手術では腱鞘10を直視せずに手術を行うから、手術に際しては腱鞘10の位置を感触で探りながら切開を行う。このため、腱などを損傷しないで手術できるようにたとえば図のように、ガード14aを刃先から若干突出させ、腱などを損傷させないで切開しやすくしたものなどが考案されている。(「整形外科」1981年、32巻、12号)

（発明が解決しようとする問題点）

ばね指を治療するための手術としては、上記の開放性手術および経皮的切開手術が通常行われている方法であるが、これらの手術方法においては手術操作上以下のような問題点がある。

① 従来の切開刀を用いた手術においては腱鞘を切開していく途中で、切開刀が腱鞘から脱転しやすい。これは屈筋腱の断面が楕円形状となつているため、その上を切開刀で切り進めていく